

## 何の葉っぱ？

那覇市立真和志幼稚園（沖縄県那覇市）

[5 歳児]

<砂場にいっぱい葉っぱがはえてる！> 5月中旬

朝、子どもたちが砂場に行くと、砂の上にたくさんの芽が出ていた。一面に生えた芽を見た子どもたちはとてもびっくりした様子で、話題になった。

ちょうど前の週、子どもたちはアサガオの種を蒔き、芽が出る様子を観察していたので、砂場にもアサガオの芽が出てきたのだと信じ込んだ。

そこで、砂場に生えた芽をアサガオの芽と比べてみようとして、いくつかの芽を植木鉢に移し替えて、アサガオの芽が生えているプランターに持っていった。するとすぐに、子どもたちは砂場の芽とアサガオの芽が違うことに気が付いた。

しかし、そこでのやりとりの中で、砂場に生えた芽が何の芽なのかは、子どもたちはわからない様子だった。

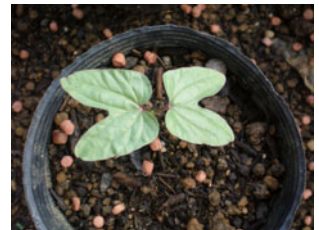


子「葉っぱの形がちがう！」  
子「砂場の葉は先がとんがっている」  
子「アサガオはハートの形だ！」

保「砂場のたくさんの芽は、何の芽かわかった？」  
子「わからない」  
子「アサガオと比べたら、違う形だったよ」  
子「どうして葉っぱが出てきたのかな？」  
子「水をかけたから葉っぱが出てきたんだよ」  
子「わかったー、誰かが種を蒔いたんじゃない？」  
子「だれが種を蒔いたんだろう？」  
子「S先生じゃない？」  
子「透明人間かも！」  
子「前の幼稚園生だと思う」  
子「小学生かもよ」  
子「夜にやってきた誰かじゃないかな」



砂場に生えた芽



アサガオの芽

誰か夜に蒔いたのか、主任のS先生に聞きに行くと、種を蒔いていないとわかる。子どもたちは悩んで考える。

A 児「あ！トックリキワタの綿が飛んできて、種が飛んできて埋まったんじゃない？」  
B 児「色水をつくる花の種かもしれないよ」  
保「どうやったらわかるかな？」

<種を育ててみよう>

みんなで話し合い「砂場の芽を育てて、トックリキワタの木になるか見てみる」ことになる。また、いろいろな種を蒔いて、砂場の芽と同じものを探そうとする。そして、いろいろな種を集め始めた。みんなが集めてきた種を育てることになった。



<いろいろな種に関心をもつ>

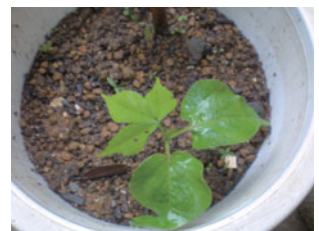
子どもたちは種のようなものを見つけると、「新しい種を見つけたよ」「これは何かな」と伝え合うようになった。

ある日の朝、庭の掃除をしようと外に出てみると、ガジュマルの木の下にたくさんの実が落ちていた。「何か落ちてー」「うわーいっぱい！」と口々に言い合う子どもたち。そのうち、「これ種だよ」「何の種かな」と言い始め、実を種だと思って集めるようになった。「先生、これも何の種かしらべよう」と言いながらも、子どもたちはその実がいったいどこから出てくるのかわからないでいた。数日後、一人の子がガジュマルの木を見上げて叫んだ。「あっ、あったー！！」木にいっぱい付いている実を見つけたその子は、得意気で大発見したことを友達に教えてまわる。わからなかったことがわかった喜びや、それを自分たちで発見したという満足感を感じている。

トックリキワタ、キンレンカ、チョウマメ、フウセンカズラ、ダイズ、砂場に落ちていた種

<葉の育ちに気付く>

ある朝、登園した子が「おばあちゃんが、アサガオの赤ちゃんの葉っぱの間から大人の葉っぱが出てくるって言ってたよ」と報告してきた。アサガオの手遊びをしていたので、双葉の形を手で作りながら、「ここから大人の葉っぱが出てくるんだね」と話し合った。実際アサガオの葉っぱを見てみると、双葉の間から本葉が出ていたので、子どもたちは「ほんとだー、大人の葉っぱだ！」と見て回る。



その頃、比べるために蒔いた種が芽を出し、双葉から本葉が出始めていた。子どもたちは、「アサガオの葉っぱみたいに、大人の葉っぱが出ているね」と葉っぱの育ちに気付く姿が見られるようになった。「トックリキワタの大人の葉っぱはモミジみたいな形だね」と気付く子もいた。

### <いったい何の芽だろう>

6月になって、植木鉢の芽が生えてきても、子どもたちの会話の中で、何の芽なのかしっかりした答えが出てこない。そのため、クラスの集まりの場で植木鉢を並べて、砂場の芽とさまざまな芽を比べて見た。葉っぱの形を見て、すぐに気付くのではないかと思われたが、すぐにわかる子もいれば、思いつきで答える子もいた。自分で発見する体験になるように、お互いに意見を言うだけで話し合いを終えることにした。

後日、雨がいっぱい降った次の日、砂場にまた大量の芽が出ていたので、子どもたちは「また芽が出てー」と思い思いに見たり抜いたりして観察し始めた。そこで、育てている植木鉢を砂場に並べて「どの芽と一緒にかな？」と保育者が声をかけると、子どもたちは自分で抜いた芽をそれぞれの植木鉢の葉っぱの横にかざして見て、「これは違う」などと言いながら、「これと似てる！」と、トックリキワタの葉っぱを指さし始めた。クラス全体で見比べた時には、はっきりしない様子が見られたが、この日は自信をもって「これと同じ！」と言える姿が見られた。(自分の手をもって自分で1つずつ比べることが、一番わかりやすいやり方だったのだろう。)



### <見つけたものを絵に描いてみよう>

集めた6種類の植物以外に、アサガオやヒマワリ、ネギ、イモのカズラなど、園庭にはいろいろな植物があり、子どもたちは毎日水やりをして育てている。

保育者の願い：トックリキワタの葉っぱを探る活動を通して、子どもたちがいろいろな植物にも興味をもち、発見したり気付いたりして欲しい。



園庭で見つけた植物の絵を描く活動を多く行った。

「どんな形をしているか」「どんな色をしているか」「近くにどんな虫がいるか」など、子どもたちが気付いたことを絵に描いて壁面に貼れるように環境を工夫する。



植物によって葉っぱの形が違うことに気づき、特徴をとらえて描く子どもたちの姿が見られた。また、「太陽がないと、葉っぱが育たないよ」という子どもの気づきから、太陽を描き入れ、「水をかけないと大きくなならないよ」という声から雨を降らすなど、子どもたちが自然の成り立ちを理解して表現を楽しむ様子がうかがえた。



園庭の植物を描いた壁面



## 考察

トックリキワタの芽の不思議さを通して、子どもたちはいろいろな種や芽に興味をもち、どこから種が来たのか考えながら、身近な園庭の環境に自分なりの思いをもってかかわることができた。何の芽かを知ることよりも、いろいろな想像をしたり、園庭のあちこちを探し回ったり、友達と自分の考えを伝え合ったりする活動の過程が大切だということを、子どもたちの姿を通して感じることもできた。また、自分の思いを言葉で表現するだけでなく絵に描いて表現することで気づきを明確にし、理解を深めることができたと思う。保育者が教えてしまえば簡単なことも、子どもたちとじっくり考えていくことで、日常のどんな事象も、子どもたちの科学する心の育ちを助けてくれるのだと思われる。

## ポイント

“多くの芽が出ている”という、いつもと違う砂場に不思議や疑問を感じた子どもたちは、「その芽が何の芽なのか？」探求を始めました。こうして、**自発的に課題をもち展開することで、身近にある様々な植物やその芽、種への観察や関心が深まっています。**「何の芽か、知るために育ててみる」「予想できる身近な種を育てて比べる」「どうして砂場で芽を出したのか考える(イメージする)」などの具体的な体験が引き出されるような環境や、表現につながる環境構成により、豊かな体験が重ねられています。